

## 〈終わり〉からの〈始まり〉

京都文教大学人間学研究所 所長 平岡 聡

1996年、人間学部一学部に文化人類学科と臨床心理学科の二学科を擁し、小規模ながらもキラリと光る個性的な大学として京都文教大学は呱呱の声を上げた。その学部名称にもなっている「人間学」、すなわち「人間とは何か」を追究する学問を推進するため、開学と同時に立ち上げられたのが人間学研究所である。「人間とは何か」を追究するアプローチは、無限にあるが、本学は二つの学科の学問である文化人類学と臨床心理学の学際的研究を軸にこれを推進してきた。

当初は両学科の教員はもちろん、共通教育を担当する教員も参加するユニークな研究会がたくさん作られ、またその学的成果は、論文に留まらず、著書としても多数刊行された。しかし時の経過とともに、18歳人口の減少などにより、大学は厳しい時代を迎えることになる。そして本学もその影響を受けて改組を余儀なくされた結果、2008年には臨床心理学科が臨床心理学部として独立、また2012年には人間学部が総合社会学部へと姿をかえたことで、「人間学」の名称は表舞台からは消えることになった。

しかし、総合社会学部は「社会（ソーシャルマネジメント）」という視点から人間を、また臨床心理学部は「個人（ヒューマンケア）」という視点から人間を考察し、建学の理念「四弘誓願」の精神「ともいき」を実現する学問を推進しているので、人間学の伝統は依然として息づいていると言えよう。

ただし、人間学部自体がなくなった現在、人間学研究所が人間学研究所として存続すべきかどうかは、近年、学内で問題となり、見直さざるをえなくなった。そして、人間学研究所を発展継承する形で、来年度より「ともいき研究推進センター」（以下、センター）を立ち上げる決断をした。これは人間学研究所が開学以来、20年以上をかけて培ってきた歴史を継承し、本学の研究をさらに発展させる役割を担うことになる。建学の理念の推進は、つねに「人間とは何か」という問いとともにあるので、名称は変わっても、その精神は新たなセンターを土台から支え続けることになるだろう。

というわけで、今回が人間学研究所としては最後の紀要となる。何かが終わるのは寂しいかぎりだが、しかしこれは単なる〈終わり〉ではなく、あらたなセンターの〈始まり〉をも意味する。人間学研究所の過去の蓄積があったればこそ、その土台の上にセンターを創設することができる。これを肝に銘じ、人間学研究所の最後の紀要を皆さんにお届けしたい。